

- Applied to Radio Scattering. J.A.P., **27**, p. 699.
- 45) Villars, F., and Weisskopf, V.F., 1955: On the Scattering of Radio Waves by Turbulent Fluctuations of the Atmosphere. Proc. I.R.E., **43**, p. 1232. Wheelon, A.D., 1957: Phys. Rev., **105**, p. 1706.
- 46) Villars, F., and Weisskopf, V.F., 1954: The Scattering of Electromagnetic Waves by Turbulent Atmospheric Fluctuations. Phys. Rev., **94**, p. 232.
- 47) Birnbaum, G., and Bussey, H.E., 1950: Amplitude, Scale, and Spectrum of Refractive Index Inhomogeneities in the First 125 Meters of the Atmosphere. Proc. I.R.E., **43**, p. 1412.
- 48) たとえば Proc. I.R.E., の1955年10月号(散乱伝ばんの特集号)の諸論文。
- 49) Crain, C.M., 1950: Survey of Airborne Microwave Refractometer Measurements. Proc. I.R.E., **43**, p. 1405.
- 50) Rice, S.O., 1953: Proc. I.R.E., **41**, p. 274.
- 51) Gordon, W.E., 1955: Proc. I.R.E., **43**, p. 23.
- 52) Silverman, R.A., 1957: Fading of Radio Waves Scattered by Dielectric Turbulence. J.A.P., **28**, p. 506.
- 53) Chisholm, J.H., Portman, P.A., DeBettencourt, J.T., and Roche, J.F., 1955: Investigations of Angular Scattering and Multipath Properties of Tropospheric Propagation of Short Radio Waves Beyond the Horizon. Proc. I.R.E., **43**, p. 1317. Chisholm, J.H., et al., 1957: Papers Presented at URSI Meeting, Washington, D.C.
- 54) Baur, J.R., 1956: MIT Lincoln Lab. Tech. Rep. 124.
- 55) Friis, H.T., et al., 1957: B.S.T.J., **36**, p. 627.
- 56) たとえば Carroll, T.J., and Ring, R.M., 1955: Propagation of Short Radio Waves in a Normally Stratified Troposphere. Proc. I.R.E., **43**, p. 1384.
- 57) その一つとして, たとえば, 駒林誠, 1958: 降雨機構について. 天気, **5**, p. 205.

第7回航空気象シンポジウム

第7回航空気象シンポジウムは昭和33年10月15日午後1時から気象庁研修所東京教室で開催した。参加者約30名で活発な討論が行われた。講演題目及び内容の概要は次のとおりである。

1. 台風周辺の飛行例

黒岡 元

台風号22の飛行機観測資料から、台風による飛行障害天気の Severe 域 (Severe turbulence, Severe icing) 及び Moderate 域が台風の移動に伴ってどのように分布するかを示した。

2. 太平洋における高層の卓越気圧配置型と風速場に対する調査

杉本 豊

太平洋地域で卓越する気圧配置を主として高層の高気圧に着目して分類調査し、それら各卓越気圧配置に伴う風速場の特性を明らかにし、太平洋における上層風予報の参考を作成した。

3. 台湾西部平野における各期(1~3 km) 上層の特異風について

田辺 三郎

台湾西部平野における各期1~3 kmの上層風は、台湾の地形の特性の影響をうけるが、季節風の吹き出しから一般流が東寄りになる各過程で、その特異性が変化することを示した。

4. 中部太平洋における気圧配置飛行の研究(第2報)

光野 一

飛行時間が最短にできるいわゆる Minimum flight

path を Wave front theory によって、実際の天気図から求むるにはかなりの時間がかかるが、東京—ホノルル間の飛行の場合には、館野、V一定点、ミッドウェー、及びホノルルの等圧面高度が予想できれば、それから統計的に求めた相関関係からかなりの精度でその Path を求めることができることを示した。

5. 太平洋の四季別の 200 ミリバール、ノルマルチャートについて

気象庁 高層課

Aerological data, アメリカの Historical map, 及びその他の資料から北太平洋地域における 200mb の 5 年平均のノルマルチャートを 1. 4. 7. 10月について作成し、200mb上の等高度線、等温線、等風速線及び jet 軸の特性などについて示した。

6. 沖縄における台風域内の上層風について

今井 光男

沖縄の半径 300 マイル以内に接近した台風の上層風の分布をその経路別に調査し、台風の北東及び南東象限にあたるとときは上層 1.5~2.5 km 附近で風速が弱まり、それより上層で漸増することを示した。

7. 特別映写会

講演討論が終って、東京管区気象台技術課作成の台風 11号、21号、及び 22号のレーダーによる 16 ミリ映画を鑑賞した。

(上松清記)